

「金閣寺」論

遠藤伸治

はじめに

衆知のように、作品「金閣寺」は、実際に起こった放火事件に取材して書かれた作品であり、作者である三島由紀夫自身が、この作品の主題について次のようなことを述べていることも、広く知られている。

私が「金閣寺」で書いたことは、犯罪の動機の究明であつたが、「美」といふ淺薄な愚かしい觀念だけでも、國寶に對する放火といふやうな犯罪の十分な動機になり得る。(注)

ここでは、作品「金閣寺」で書かれたことは、放火事件の動機の究明であると述べられている。

ところが、「金閣寺」について三島が次のように語っていることも指摘されている。

自分を客観して、一人の芸術家の固定觀念となつた美意識が行動の場でどうつきぬけられて行くか、それを書きたかつた。(注)

一般的に考へるならば、一人の放火犯人と芸術家三島由紀夫とが等身大であるはずはなく、美意識を行動の場でつきぬけて行くことといった想念を放火事件に託そうとすることには、当然無理が生じるであらう。

事實、小林秀雄との対談において三島は、「美といふ固定觀念に追ひ詰められた男といふのを、ぼくはあの中(作品「金閣寺」)の中——引用者注)で藝術家の象徴みたいになつてもりで書いた」と発言する一方で、小林の「美の問題といふことでなくてもよかつたんぢやないの。」という間に、「全然、美でなくてもいいんです。」とも答えている。(注)

つまり、「金閣寺」という作品は、客観化されているにせよ藝術家三島由紀夫自身と美との問題を描いたのか、あるいは、固定觀念に追ひ詰められて放火した一犯罪者を描いたのか、といったことが曖昧な形で重ね合わされているのである。

もちろん、そこで、作品「金閣寺」の重層性、多様性を評価し、それらを大きな破綻もなく重ね合わせた、すなわち、現実の放火事件から「觀念的私小説」といった「文学作品」をつくり上げた作者の手腕を評価することもできるであらうし、逆に、現実の事件を究明するならば藝術家の問題に歪曲する必要はなく、また、三島由紀夫自身を描くならば放火犯として描く必要はないという意味で、事件の究明としても、自己表現としても不十分なものに終わったと批判することもできるであらう。

しかし、こうした評価を下す前に、先に述べたような曖昧さがど

のようにして生じたのかということを考えてみる必要があるように思われるのである。それが生じた原因や経過を明らかにできれば、それこそが三島由紀夫の本質的問題を表わしていると言ふことができるのではないだろうか。以下、作品内の「私」、すなわち、放火犯でも三島でもある曖昧な「私」の姿を分析することによって、こうしたことを明らかにしてゆきたい。

I

作品「金閣寺」は次のように始められる。

幼時から父は、私によく、金閣のことを語つた。(金吾)

そして、この父の言葉が、「私」の心の中で、途方もない幻影に育つてゆくのである。

寫眞や教科書で、現実の金閣をたびたび見ながら、私の心の中では、父の語つた金閣の幻のほうが勝を制した。父は決して現実の金閣が金色にかがやいてゐるなどと語らなかつた筈だが、父によれば、金閣ほど美しいものは地上になく、又金閣といふその字面、その音韻から、私の心が描きだした金閣は、途方もないものであつた。

つまり、幼時から「私」の心に刻み込まれてきたのは、金閣という地上最高の美について語る父の言葉である。そして、「金閣というその字面や、その音韻から」、「途方もない」心象を「心に描きだし」てきたのである。それは、写真や教科書による「現実の金閣」を否定した、輝く美の幻影である。

しかし、次のようにも書かれていたのである。

金閣はしかし私にとつて、決して一つの觀念ではなかつた。

山々がその眺望を隔ててゐるけれど、見ようと思へばそこへ行つて見ることもできる一つの物だつた。美は、かくて指にも觸れ、目にもはつきり映る一つの物であつた。

確かに、父の言葉は、最高の美が金閣という一つの建築物として実在していることを、それをまだ実際に見たことのない「私」に、約束しているのである。

したがって、幼時の「私」は、現実を否定した幻影が、現実の物として実在するという、論理的には全く矛盾した夢想の中を生きてきたと言へる。「私」にとつて、現実には幻影と完全に分化してはいないのであり、また、「私」が幼時から聞いて育つた言葉は、心に描き出した心象をそのまま少しも抑圧することなく表現できるものなのである。

こうした夢想的な現実観や言語観といったものは、幼時にあつては必ずしも特殊なものではないように思われる。幼時には、現実の意味される内容を実際の体験によつて確かめることのできる言葉よりも、それができない言葉の方が多いであろうし、また、現実の意味内容をよく知らないために、そうした言葉によつて幻想を抱くことも、十分に考えられることである。

したがって、こうした幼時の「私」に特殊なところがあるならば、ここに描かれていることではなく、むしろ、一般的には描かれるべきものが描かれていない点に、それはあるように思われる。すなわち、幼時の「私」にとつての父は、金閣について語る者としてしか描かれておらず、次に描かれるのは、叔父の家から中学に通うようになった「私」を京都に連れて行き、金閣寺の住職である老師に「私」を託した後、病死してしまう父の姿なのである。また、母

親について描かれるのは、中学校に入学した夏休みに、その情事を目撃した記憶としてであり、そして、その記憶の中で父は、その場に居ながら「私」に目隠しをすることしかできないものとして描かれている。つまり、幼時の「私」は、父も母もその役割を果さず、父と母と子という一般的な家族関係が欠けた環境の中で育ってきたと言つてよいように思われるのである。

こうした環境で幼時を過ごした「私」の特殊性は、先に述べた夢想的な現実観や言語観といったものと関連させて考えるならば、そうした夢想を抑圧するもの欠如として表われるように思われる。なぜなら、「私」は、父から夢想を与えられるばかりで、逆に、心に描いたものが常にそのまま現実とはならないことを幼児の心に刻みつけるような、父母との一般的な関係を欠いているからである。そして、このような「私」の特殊性が、吃音という形で描かれているように思われる。

吃りは、いふまでもなく、私と外界とのあひだに一つの障壁を置いた。最初の音がうまく出ない。その最初の音が、私の内界と外界との間の鍵のやうなものであるのに、鍵がうまくあいたためがない。一般の人は、自由に言葉をあやつることによつて、内界と外界との間の戸をあけつばなしにして、風とほしをよくしておくことができるのに、私にはそれがどうしてもできない。

(略)

かういふ少年は、たやすく想像されるやうに、二種類の相反した權力意志を抱くやうになる。私は歴史における暴君の記述が好きであつた。吃りで、無口な暴君で私があれば、家來ども

は私の顔色をうかがつて、ひねもすおびえて暮らすことになるであらう。(略) かうして日頃私をさげすむ教師や學友を、片つぱしから處刑する空想をたのしむ一方、私はまた内面世界の王者、靜かな諦觀にみちた大藝術家になる空想をも楽しんだ。外見こそ貧しかったが、私の内界は誰よりも、かうして富んだ。何か拭ひがたい負け目を持つた少年が、自分はひそかに選ばれた者だ、と考へるのは、當然ではあるまいか。

ここに描かれている「私」の心理は、空想への逃避、あるいは、劣等補償といった言葉で説明されるやうな、確かに誰にでも「たやすく想像されるやうな」一般的なものである。

「私」は、自分の欲望をそのまま実現できる「暴君」になる空想と、「内面世界の王者、靜かな諦觀にみちた大藝術家になる空想」とを樂しんでいるが、確かに、こうした外界だけの人間や内面世界だけの人間は空想の産物でしかなく、現実には、暴君であっても思いのままにならぬ欲望を空想によつて慰め、大藝術家であっても現実的な欲望にかられることがあるであらう。つまり、ここでの「私」のように、内面の欲望と外界の現実という二つの領域に分裂していることは、現実の人間の一般的なあり様なのである。

したがって、「私」の特殊性は、「私」が内面の欲望と外界の現実とに分裂していることではなく、それが一般的なものであるにもかかわらず、自分だけの個別的なものであるかのように考えているところにある。

「私」は、「一般の人は、自由に言葉をあやつることによつて、内界と外界との間の戸をあけつばなしにして、風とほしをよくしておくことができる」のに対し、吃音者である自分だけにそれができな

いと考え、そこで、その「拭ひがたい負け目」を裏返して、「自分がひそかに選ばれた者だ」と思っている。

しかし、「一般の人」でも、言葉をやつることによって、内面の欲望と外界の現実とをそのまま結びつけることができるわけではない。先に述べたように、幼時に言葉を学習する際、外界の現実に対する認識不足から、言葉の意味内容について現実とは異なった心象を抱くことが一般的にあるとするならば、その言葉が外界と結びつくときに、その心象と実際に意味される現実との間の食い違いに直面することも、一般的な経験であると言えよう。つまり、言葉が外界と結びつくとき、内面の心象と外界の現実とを結びつけようとする欲望、あるいは、心象をそのまま現実とするような夢想は、心象と現実との食い違いによって、抑圧されるのである。それにもかかわらず、我々が自由に言葉をやつることができるようになるのは、こうした食い違いによる抑圧に慣れ、それに対して無意識に対処できるようになるからであろう。

ところが、心に描き出した心象をそのまま現実と結びつける夢想的な言葉を聞かされ、そうした夢想を抑圧する一般的な父母との関係を欠いて育ってきた「私」は、自分の言葉が外界と結びつこうとしたときに、意味しようとした心象と意味される現実との食い違いによる抑圧を強く感じる一方で、それを一般的なこととして認めることはできないのである。すなわち、「私」は、意味しようとしたものと意味されるものとの間に食い違いがあることは認めるのであるが、それを自分だけの個別的事情であるとして、心象をそのまま現実とする夢想的な現実観や言語観は維持しているのである。そして、「私」は、どこかにあるはずの、心象を完全に表現する言

葉を探し求めてもどかしい思いをするのであり、それが、「最初の音おんがうまく出ない」こととして表われているのである。

こうして「私」は、一般に外界の現実を抑圧されたものであり、抑圧のない心象は内面にあるにもかかわらず、逆に、心象がそのまま現実となるような夢想的な世界が外界に現実として存在し、そこから自分だけが疎外されているのだという倒錯に陥っているのである。こうした現実に対する特殊な関係は、「私」が成長し、現実を認識することによって、一般的な形に変わってゆく可能性もあるように思われる。しかし、ここで、戦争という特殊な歴史的状況によって、「私」の特殊性がさらに助長されるのである。

II

戦争中の「私」は、まず、海軍機関学校の生徒とのエピソードとして描かれる。

「何だ、吃りか。貴様も海機へ入らんか。吃りなんか、一日で叩き直してやるぞ」

私はどうしてだか、咄嗟に明瞭な返事をした。言葉はすらすらと流れ、意志とかかはりなく、あつといふ間まに出た。

「入りません。僕は坊主になるんです」

皆はしんとした。若い英雄はうつむいて、そこらの草の莖を摘んで、口にくはへた。

「ふうん、そんならあと何年かで、俺も貴様の厄介になるわけだな」

その年はすでに太平洋戦争がはじまっていた。

ここで「私」は、「貴様も海機へ入らんか」という言葉に対して、

「僕は坊主になるんです」と、吃ることなくすらすらと明瞭に答えている。したがって、心象Ⅱ現実という外界から自分だけが疎外されているという、「私」の特殊な疎外感はず解消されている。しかし、「私」は、心象と現実との差異によって夢想が抑圧される状態を一般的なこととして受け入れたわけではない。「私」は、すらすら話したことで十分に満足せず、さらに海軍機関学校の生徒の短剣を欲し、それを傷つける。

誇りをもつと軽く、明るく、よく目に見え、燦然としてゐなければならなかつた。目に見えるものがほしい。誰の目にも見えて、それが私の誇りとなるやうなものがほしい。例へば、彼の腰に吊つてゐる短剣は正にさういふものだ。

つまり、「私」は、外界と結びついてはいるが、抑圧された状態を一般的なこととして受け入れたのではなく、逆に、短剣といった目の前の物を、燦然と輝く夢想の対象としているのである。すなわち、「私」のあり様が変わつたのではなく、外界の現実の方が、誰でもが腰に短剣を吊つた「若い英雄」になりうるかのような、戦争という特殊な状態になつたのであり、「私」が結びついたのは、こうした夢想化された外界なのである。

しかも、そうした夢想化された外界と「私」とを結びつけている、「海機へ入らんか」「坊主になるんです」という言葉においては、それらの言葉が本来持つていたはずの意味内容が希薄であり、意味しようとする心象と意味される現実との差異が、そして、その差異による夢想に対する抑圧が無意味化されている。すなわち、「若い英雄」である「海機」の生徒としての人生も、あるいは、僧侶になる平凡な人生すらも、「あと何年か」後の戦死の予感によつ

て、ほとんど無意味なものと化していたのである。

つまり、心象Ⅱ現実という夢想の中で育つてきた「私」は、心象と現実との差異によって夢想が抑圧されたとき、そうした抑圧された状態を一般的なこととして認めず、自分だけが疎外されているとしたのであるが、戦争という特殊な状況の中で、心象と現実との差異（例へば、英雄的な人生と平凡な人生との差異）が無意味化し、抑圧が希薄になることによつて、夢想との結びつきをある程度感じることができたのである。しかし、その一方で「私」は、そうした無意味化による疎外の解消では十分に満足できず、自分が疎外されているもの（例へば短剣）を、本当の意味で心象を現実化したものとして欲しているのである。

このような構造は、有爲子、鶴川、金閨についてもあてはまり、すなわち、「金閨寺」の「敗戦」以前の作品構造であると言える。まず、脱走兵の隠れ家を憲兵に尋問されている有爲子は、次のように描かれている。

私は今まで、あれほど拒否にあふれた顔を見たことがない。私は自分の顔を、世界から拒まれた顔だと思つてゐる。しかるに有爲子の顔は世界を拒んでゐた。

「私」にとつて有爲子は、恋人である脱走兵をかばう悲劇のヒロインであり、「世界を拒ん」だ、すなわち、決して現実とは相容れない心象である。

その有爲子が恋人を裏切り、隠れ家に憲兵を案内するのを見て、次のように「私」は思う。

その裏切りは、星や月や鈴杉と同じものだった。つまり、われわれ證人と一緒にこの世界に住み、この自然を受け容れること

だった。彼女はわれわれの代表者として、そこを昇つて行つたのである。

息をはずませて、私はかう思はずにはゐられなかつた。

『裏切ることによつて、たうたう彼女は、俺をも受け容れたんだ。彼女は今こそ俺のものなんだ』

裏切りという行為によつて、決して現実と相容れない心象であつた有爲子が、「われわれ證人と一緒にこの世界に住」むものになつてゐる。すなわち、心象と現実とが結びついたのである。そして同時に、「世界から拒まれた」存在であつた「私」が、「われわれ證人」に交わり、有爲子とも結びついてゐる。つまり、心象と現実との差異による抑圧が希薄になり、「私」は、心象と現実の両方、すなわち、夢想化した外界と結びつくことができたのである。

しかし、それは、裏切りという、ヒロインとそうでない平凡な人間との差異を無意味化する行為によつてなされたのであり、したがつて「私」は、すぐに次のような不満を感じるのである。

しかしそれから先の彼女は別人になつてしまふ。おそらく石段を登り切つた有爲子は、もう一度私を、われわれを裏切つたのだ。それから先の彼女は、世界を全的に拒みもしない。全的に受け容れもしない。ただの愛慾の秩序に身を屈し、一人の男のための女に身を落してしまつた。

次に、戦争中の「私」の友人である鶴川についていへば、彼は、平凡な人生と言葉とに対する「私」の夢想を体现する人物であり、意味内容の希薄な言葉によつて、そうした夢想と「私」とを結びつけてくれる人物である。

先に述べたように、「私」は、親としての役割を充分に果して

れなかつた両親に対して屈折した感情を抱いてゐる。そして、その母親が訪ねてくる日、鶴川は、動員されていた工場から急いで帰るように「私」を促す。

「走つたかて、しやうがない。しんどいんやもん、足を引きずつてかへつたらええのんや」

「さうしてお母さんに同情させて、甘つたれるつもりなんだな」

鶴川はいつもかうして、私の誤解に充ちた解説者であつた。彼は私には少しもうるさくない、必要な人間になつてゐた。彼は私のまことに善意な通譯者、私の言葉を現世の言葉に翻譯してくれる、かけがへのない友であつた。

さうだ。時には鶴川は、あの鉛から黄金を作り出す錬金術師のやうにも思はれた。私は寫眞の陰翳、彼はその陽晝であつた。ひとたび彼の心に澆過されると、私の混濁した暗い感情が、ひとつのこらず、透明な、光りを放つ感情に變るのを、私は何度おどろいて眺めたことであらう。

鶴川の言葉は、母に「甘つたれる」子供という、いかにもありふれた一般的な家族関係を意味している。ところが、そうした一般的な関係を欠いて育つた「私」には、それが「透明な、光りを放つ感情」に思われるのである。そして、そうした平凡で輝かしい感情からの疎外を、「誤解に充ちた」、すなわち、現実の意味内容が希薄で、心象と現実との差異を無意味化するような言葉が、ある程度解消している。

「私」にとって鶴川は、「私の言葉を現世の言葉に翻譯してくれる」「通譯者」であり、「鉛から黄金を作り出す錬金術師のやうに

も思はれ」ている。すなわち、「私」にとつて、「現世」はそのまま「黄金」のような世界であり、そこから疎外されている「鉛」ではない。「私」も、鶴川の言葉の「錬金術」によって、輝かしい「現世」と結びつくことができると思われていたのである。

最後に、金閣についての検証を行う。「私」にとつての金閣が、心象と現実との未分化な夢想であることは、すでに述べたとおりである。それが分裂の危機にさらされるのは、父に連れられて現実の金閣を見たときである。

私はいろいろな角度を變へ、あるひは首を傾けて眺めた。何の感動も起らなかった。それは古い黒ずんだ小つげけな三階建にすぎなかつた。

ここで「私」は、現実の金閣を実際に見ることによって心象と現実との差異に、すなわち、心象をそのまま現実とする幼時からの夢想を抑圧するものに、直面しているのである。

この抑圧に対して、「私」は、金閣の模型を見ることによって、夢想を守る。

この模型は私の氣に入つた。このほうがむしろ、私の夢みてゐる大金閣に近かつた。そして大きな金閣の内部にこんなそつくりそのままの小さな金閣が納まつてゐるさまは、大宇宙の中に小宇宙が存在するやうな、無限の照應を思はせた。はじめて私は夢みることができた。

この金閣の模型は、心象と現実との差異による抑圧に直面しながらも、その抑圧から夢想を守り、維持する一方で、「私」自身は、そうした夢想から疎外されるという点で、「私」の吃音と同じ機能を担っている。「私」は、心象をそのまま現実と結びつけることが

一般に可能であるという夢想を維持する一方で、自分だけが吃音者としてそこから疎外されているとしたのであるが、ここでもやはり、模型によって金閣に関する夢想を立ち直らせる一方で、現実の金閣が美しく燦然と輝くという夢想からは、疎外されるのである。そして、こうした疎外が、戦火で亡びる予感という、心象と現実との差異を無意味化するものによって、ある程度解消される。

この美しいものが遠からず灰になるのだ、と私は思った。それによつて、心象の金閣と現実の金閣とは、繪絹を透かしてなぞつて描いた繪を、元の繪の上に重ね合わせるやうに、(略)重なつて來た。

このような、心象と現実という形で夢想化された外界に「私」は結びつくのである。

私を拒絶し、私を疎外してゐるやうに思はれたものとの間に、橋が懸けられたと私は感じた。

私を焼き亡ぼす火は金閣をも焼き亡ぼすだらうといふ考へは、私をほとんど酔はせたのである。

そして、やはり「私」は、こうした無意味化による疎外の解消に、「ほとんど酔はせ」られてはいても、完全に満足していたわけではなく、無意味化が終わり、再び自分を疎外するものになつた、「敗戦」の日の金閣に、今までにないほど魅かれるのである。

たうとう空襲に焼かれなかつたこと、今日からのちはもうその惧れがないこと、このことが金閣をして、再び、「昔から自分はこの所に居り、未來永劫ここに居るだらう」といふ表情を、取戻させたのちがひない。

(略)もつと異様なことには、金閣が折々に示した美のうち

でも、この日ほど美しく見えたことはなかつたのである。

こうして「私」は、戦争以前の疎外された状態に再び戻るのである。すなわち、「戦敗」によって、現実の意味内容が、そして、心象と現実との差異が復活したのであり、「私」は、心象||現実という夢想は、心象と現実とが一致しない「敗戦」後の世界には決して存在しないこと、したがって、心象をそのまま現実と結びつけようとする夢想的な欲望に対して抑圧を加えないかぎり、現実世界と結びつくことができないということに、再び直面しなければならぬのである。

しかし、「私」は、「敗戦」後すぐに、こうした抑圧を、そして内面の心象と外界の現実という二つの領域に身を置く自我の分裂を、一般的なこととして認め、それに直面したわけではない。「敗戦」後の混乱した社会の中で、「私」は、もう一度、心象||現実という夢想を追求するのである。

III

「敗戦」後における、現実の意味内容の復活は、具体的には、僧侶になるための日常生活の復活として描かれている。戦争中には、ほとんど無意味な現象と化していたために、やすやすと自己を同一化できた僧侶になる自分といったものが、一転して不変の実体としての姿を現わし、「私」の夢想を抑圧するのである。そして、こうした抑圧は、とりわけ、金閣寺の住職である老師との関係によって表わされている。

老師は、「敗戦」の日に、「南泉斬猫」の講話を行う。一匹の猫をめぐって争う弟子たちに向かって、「大衆道ひ得ば即ち救ひ得ん。

道ひ得ずんば即ち斬却せん」と言って、結局猫を斬って捨てた南泉和尚と、それに対して履を頭にのせて答えた高弟の趙州とについての公案を、老師は次のように説明する。

南泉和尚が猫を斬つたのは、自我の迷妄を断ち、妄念妄想の根源を斬つたのである。非情の實踐によって、猫の首を斬り、一切の矛盾、對立、自他の確執を断つたのである。これを殺人セツピン刀と呼ぶなら、趙州のそれは、活人劍である。泥にまみれ、人にさげすまれる履といふものを、限らない寛容によつて頭上にいただき、菩薩道を實踐したのである。

この老師の説明によれば、「南泉斬猫」という公案の意味内容は、欲望に抑圧を加えることである。すなわち、弟子たちは、猫に對する欲望を抱けば、その「妄念妄想の根源」である猫を南泉和尚に斬られてしまい、猫を活かすためには、趙州のように自己の欲望を自ら抑えなければならぬのである。

もし仮に、こうした意味内容からのみ、南泉和尚と弟子たちとの関係について考えるならば、弟子たちにとって和尚は、自分たちの欲望を抑えつける権力者でしかないであろう。なぜなら、弟子たちには、欲望の対象を奪われるか、あるいは、自ら欲望を抑えるか、という二つ以外に道はないのであるから。

そして、「私」自身、「敗戦」後の風俗と老師の弟子としての生活の中で、まさに「南泉斬猫」の講話の中の弟子たちと同様の状況に陥る。すなわち、「私」は、金閣を見物に来た米兵に強いられて娼婦の腹を踏むという事件を起こしたその日に、老師から大学進学を許され、その結果、次のような心理的葛藤状況に陥るのである。

大學進學の餌を與へておいて、それと私の懺悔とを引換へにして、もし私が懺悔をしなければ、その不正直の罰に進學を差止め、もし懺悔すれば、改悛のしるしを見究めてから、今度は格別に恩着せがまし、大學進學を許すつもりかもしれない。そしてもつとも大きな罨は、老師が副司さんに、このことを私に告げるな、と命じた點にあるのだ。私がもし本當に無辜なら、かくて、私は何も感ぜず、何も知らずにその日その日を送ることができる。一方、私がもし非行を犯してゐれば、そして私の多少の知恵があれば、無辜の私が送るであらう純潔な沈黙の日々を、つまり決して懺悔の必要のない日々を、完全に模倣することができる。いや、模倣すればよいのである。それが最善の方法であり、それが私の身の明しを立てる唯一の道なのだ。老師はそれを暗示している。その罨に私を引つけてゐる。……ここに思ひいたると、私は怒りに驅られた。

ここでの「私」は、どうしても抑圧をはねのけることはできないというジレンマに陥っている。すなわち、懺悔をしなければ、進學差止めという形で抑えつけられる。言わば、猫を斬られてしまう。逆に、懺悔をすれば、進學は許されるかもしれないが、それは自ら改悛の情を表わすことであり、言わば、趙州のように猫を活かすために自己の欲望を自分で抑圧することである。しかも、こうした抑圧を無視しようとして黙っていたとしても、それは「無辜」であることを「模倣」しているとみなされ、すなわち、内面の欲望がそのまま外界に表われないように抑圧していることになる。したがって、こうした考えにとらわれている限り、「私」には老師の抑圧から逃れる道はなく、追い詰められた「私」は、怒りに駆られるまで

いたっているのである。

このようにして、「私」にとって、老師は、精神的圧迫を与える巨大な存在へと膨れ上がってゆくのである。

かつては人並に敬意も拂ひ、批判の目で眺めてもゐた老師の姿は、徐々に、怪物的な巨きさを得て、人間らしい心を持つた存在とは見えなくなつた。それは何度目を外らさうとしてもそこに存在し、奇怪な城のやうにそこにわだかまつてゐた。

一方、こうした強い抑圧を、「敗戦」後の現実から絶え間なく感じる「私」にとって、抑圧に対抗することが輝かしいものに思われてくる。

ふしぎなことである。あの當座には少しも罪を思はせなかつた行爲、女を踏んだといふあの行爲が、記憶の中で、だんだんと輝やかだしたのである。(略)あの行爲は砂金のやうに私の記憶に沈殿し、いつまでも目を射る煌めきを放ちだした。惡の煌めき。さうだ。たとへ些細な惡にもせよ、惡を犯したといふ明顯な意識は、いつのまにか私に備はつた。勳章のやうに、それは私の胸の内側にかかつてゐた。

それは、「敗戦」後の社会から受ける抑圧に対抗するものではあるが、しかし、「敗戦」後の社会を全く拒絶するものではなく、逆に社会に適合するものでもある。「敗戦」後の社会は、抑圧であると同時に、その抑圧に対抗して自己の欲望を満たそうとするもの、「私」の言葉を使えば、「惡の煌めき」を持ったものであったからである。

『これが俗世だ』と私は思つた。『戦争がをはつて、この灯の下で、人々は邪惡な考へにかられてゐる。(略)どうぞわが心の

中の邪悪が、繁殖し、無數に殖え、きらめきを放つて、この目の前のおびただしい灯と、ひとつひとつ照應を保ちますやうに！それを包む私の心の暗黒が、この無數の灯を包む夜の暗黒と等しくなりますやうに！」

「私」は、自分の「胸の内側」にかけた「悪」の「勳章」のきらめきという心象とを、「敗戦」後の「俗世」とを結びつけて考えようとしている。つまり、戦争中には、心象と現実との差異を無意味化するもの（例えば、戦死の予感や意味内容の希薄化した言葉など）によつてある程度解消されていた、心象と現実という夢想からの疎外が、「敗戦」後には、「悪」を為すことによつて解消されるのではないかという思いに、「私」は魅せられているのである。

こうした、「敗戦」直後の「私」の心をとらえた「悪」、すなわち、抑圧に対抗するという点で夢想の対象であり、同時に、現実の中で欲望を満たすという点で現実の人生でもあるような存在、という期待を担って登場するのが、柏木である。

中學時代に先輩の短剣の鞘に傷をつけた私は、人生の明るい表側に對する無資格を、すでに自分の上に明確に見てゐた。しかるに柏木は裏側から人生に達する暗い抜け道をはじめて教へてくれた友であつた。それは一見破滅へつきすすむやうに見えながら、なほ意外な術數に富み、卑劣さをそのまま勇氣に變へ、われわれが悪徳と呼んでゐるものを再び純粋なエネルギーに還元する、一種の鍊金術と呼んでもよかつた。それでも、事實それでもなほかつ、それは人生だつた。

「私」は、「鍊金術」でありながら、それでもなおかつ現実の「人生」であるような「抜け道」を、柏木の生き方に期待してい

る。すなわち、「私」は、心象をそのまま現実としようとする欲望に加えられる抑圧に対抗し、内面の心象と外界の現実とに自我が分裂することを回避する道を、「卑劣さをそのまま勇氣に變へ、われわれが悪徳と呼んでゐるものを再び純粋なエネルギーに還元」する柏木のような生き方の中に、そして、そうした生き方が必要とされる「敗戦」後の混乱した社会の中に見出そうとしたのである。

そうした「私」の期待を担った柏木は、「私」を嵐山に誘ひ、美しい令嬢を相手に彼の方法を演じてみせ、「私」にも下宿の娘を相手にそれを模倣するよう促す。

「痛い！痛い！」と柏木は眞に迫つた聲で呻いた。（略）

「かんにんえーかんにんえー今治してあげるから！今ぢきだから！」——彼女の甲高い旁若無人な聲を私をはじめてきいた。

令嬢は長い首をもたげて、周圍を見まはすやうにしたが、忽ち東屋の石の上に膝まづき、柏木の脛を抱いた。頬をすりつけ、はてはその脛に接吻したのである。

（略）

實際のところ、起るべき奇蹟は起つたらしかつた。柏木は次第に呻きをやめた。顔をあげ、あげかけたとき、又私のほうへ、冷笑的な目くばせを投げた。

柏木は、奇蹟を起こす聖女に令嬢を仕立て上げ、彼女の自尊心をくすぐることで、彼女を自分の思うままに操っている。すなわち、柏木は、抑圧をはねのけようとする自尊心の高い令嬢に、現世超越、あるいは自己聖化の夢想を提供することによつて、自己の欲望を満たしているのである。したがって、柏木のような生き方は、確かに、抑圧に対抗する独立自尊の個人を価値とする「敗戦」後の社会に適応した生き方ではある。

しかし、自己聖化の夢を演じながらも、柏木自身は、そうした夢想に対して冷笑的であり、夢想は見せかけにすぎない。柏木が求めているのは現実的の欲望であり、彼が「私」に対して行つて行く観念的の形而上学的な一種の説教も、「私」の人生の師を気取り、言わば、南泉和尚や老師のような権力的立場に立つための手段であり、見せかけなのである。

したがって、内面の心象と外界の現実という自我の分裂を、柏木のような「敗戦」後の社会に適應した生き方によって回避できるのではないかという、「私」が一旦は抱いた夢想は裏切られ、「私」は、夢想と現実とに引き裂かれてしまうことになる。それは、「私」が柏木に促されて、女と交渉を持つとうとしたときに、金閣の幻影が現われてそれを遮るといふ形で描かれる。

下宿の娘は遠く小さく、塵のやうに飛び去つた。娘が金閣から拒まれた以上、私の人生も拒まれてゐた。隈なく美に包まれながら、人生へ手を延ばすことがどうしてできよう。美の立場からしても、私に斷念を要求する権利があつたであらう。一方の手の指で永遠に觸れ、一方の手の指で人生に觸れることは不可能である。

ここに至つて、「私」は、心象Ⅱ現実という夢想が、決して存在しえないものであることに直面したのである。ここに現われた金閣の幻影は、もちろん現実の金閣ではなく、また、単なる内面の心象でもなく、心象Ⅱ現実という夢想の金閣であるが、それは、もはや決して現実と相容れることのない、永遠の夢想となり、絶対的美となつたのである。

ここで、「私」が、永遠となり、絶対となつた美の夢想を受け入れ

ることができれば、すなわち、心象Ⅱ現実とする夢想的欲望を抑圧し、内面の心象と外界の現実という決して一致しない二つの領域に分裂している自我のあり様を受け入れることができれば、心理的に追い詰められることはないであらう。現実的な態度を取るべきときには取り、夢想到耽るべきときには耽ればよいのである。そして、柏木に音楽の美を教えられるという形で、そうした生き方の可能性を探る。「私」が描かれている。

彼は自分の唇が尺八の歌口に吹きこむ息の、しばらくの間、中空に成就する美のあとに、自分の内翻足と暗い認識が、前にもましてありありと新鮮に残ることのほうを愛してゐたのだ。

美の無益さ、美がわが体内をとほりすぎて跡形もないこと、それが絶対に何ものをも變へぬこと、……柏木の愛したのはそれだつたのだ。美が私にとつてもそのやうなものであつたとしたら、私の人生はどんなに身輕になつてゐたことだらう。

柏木は、「内翻足や暗い認識」といった彼の人生の現実的な部分とは無縁なものとして、美の夢想を愛している。そして、「私」も、現実とは無縁な、純粋な音楽の美に魅力を感じるのではあるが、しかし、自分にとっての美は、そのようなものではないと思つてゐる。

こうして「私」は、解決不能の葛藤状況に陥る。現実から隔てられた形で育ち、そして、現実が無意味化するような戦争を経験した「私」には、柏木のようにまず現実を選択し、その一方で現実とは無縁のものとして美を愛するといったことができない。しかし、「敗戦」後の、柏木のような認識を通過した後の「私」は、美の夢想を信じることもできないのである。もし仮に、「私」が、美は現

実よりもはるかに高次の価値であり、絶対であり、神であると信じることができたならば、「私」はその神に任せ、現実など顧慮する必要はなく、したがって、美が自分を現実から隔てていることなど問題にならないであろう。しかし、「私」は、美をも信じていることができず、次のように叫ぶしかないのである。

「いつかきつとお前を支配してやる。二度と私の邪魔をしに來ないやうに、いつかは必ずお前をわがものにしてやるぞ」

聲はうつろに深夜の鏡湖池に響いた。

このうつろな叫びは、まさに追い詰められた者の叫び声である。しかし、「私」は、葛藤状況の中で引き裂かれ、身動きがとれない。すなわち、「私」がこれまでに描かれてきたような「私」である限り、葛藤状況は打ち破れないのである。作品「金閣寺」の「私」の中に、これまでの「私」ではない、もう一つの「私」が表われてくるのは、この叫び以降、すなわち、第七章からである。^(金閣)

IV

後から思ふと、突然に見えるこの出奔にも永い熟慮とためらひの時期があつたが、私はそれを出しぬけの衝動にかられてやつた行爲だと考へるはうを好む。何か私の内に根本的に衝動が缺けてゐるので、私は衝動の模倣をとりわけ好む。

(略)

私の出奔の直接の動機は、その前日、老師がはじめて、決然たる口調で、

「お前をゆくゆくは後繼にしようと思つてもいいが、今ははつきりさういふ氣持がないことを言うて置く」

と明言したその言葉に懸つてゐたが、宣言されたのはこれが最初とはいへ、私はずつと前からこの宣言を豫感し、覺悟してゐた筈である。(略)にもかかはらず、私は自分の出奔が、老師のこの言葉に觸發され、衝動によつて行はれたと考へるはうを好む。

このように、第七章以降では、「根本的に衝動が缺けてゐる」はずの「私」が、衝動的に行爲する人間を模倣しようとしている。つまり、「永い熟慮とためらいひ」の末でなければ行動を起こせない、認知的で論理的なこれまでの「私」では、身動きのとれなくなつた葛藤状況を、衝動による非論理的な行爲によつて打破しようとしているのである。そして、それは、ここに描かれているように、老師に叱責されて衝動的に寺を出奔する、一人の金閣寺の徒弟を模倣することなのである。

統いて、「私」は、荒れた日本海を見て、金閣を焼かなければならぬという想念を得たとし、それについて次のような運命論的・決定論的な考え方をする。

あんなに唐突に生れた想念であつたとはいへ、金閣を焼くといふ考へは、仕立卸しの洋服か何ぞのやうに、つくづくびつたりと私の身についた。生れたときから、私はそれを志してゐたかのやうだつた。

ところが金閣を焼くことを運命的に決定されているかのやうに考へながら、「私」は容易に放火に踏み切ることができず、老師が自分を追放してくれるのを待つてゐる。

私は二度と「大瀧」へ行かなかつた。なすべきことは終つた。あとは老師が授業料の使途に氣づいて、私を放逐すること

が残つてゐるだけだ。

(略)

どうしてそこまで私が、或る意味で老師の力に信頼し、老師の力を借りようとしてゐるのか、説明はむづかしかつた。自分の最後の決断を、又しても老師の放逐に委ねようとしてゐるのかわからなかつた。

「私」が「最後の決断を」「老師の放逐に委ね」なければならぬのは、もともと「私」が、老師に叱責されて寺を出奔し、授業料を遊廓で使つて寺を追放された末、放火事件を起こす一人の衝動的な男を模倣しようとしていることからみれば、当然のことである。

非衝動的な人間である「私」にとつて、金閣を焼くことなど全く無縁な行為であり、「私」と金閣を焼くこととの間には、論理的な必然性といったものはないのである。そのために、「私」と金閣を焼くこととの間を結ぶものは、運命といった、超論理的なもの以外にはなく、また、衝動的な、演じられた「私」には、そうした事情が説明できてはならないのである。

つまり、老師による叱責、金閣を焼くという啓示を受ける日本海への出奔、カルモチンや小刀の購入、遊廓での授業料の消費、老師による追放の宣言、といった放火に至るまでの過程には、そして、それらの結果としての放火という行為自体にも、葛藤状況の中で動きのとれなくなった「私」の、絶望的な願望がこめられているという以外に、何の意味もないのである。「私」が求めているのは、衝動的な人間を模倣することによって、これまでの熟慮の結果、両立が不可能となった心象と現実との葛藤を保留し、それらの結びついた夢想があたかも実在しうるかのような幸福を得ることであり、放

火という行為自体が無意味であることは、火をつける直前の「私」もはっきりと認めている。

俄かに全身に力が溢れた。とはいへ、心の一部は、これから私のやるべきことが徒爾だと執拗に告げてはゐたが、私の力は無駄事を怖れなくなつた。徒爾であるから、私はやるべきであつた。

そして、火に包まれ、金色の究竟頂での死を夢みた「私」が、いくら扉を叩いても扉は開かず、拒まれたことも、心象と現実との間の扉は決してあけっぱなしにはならないことを表わし、作品「金閣寺」が、「生きようと私は思つた。」と結ばれていることも、心象と現実との間の扉が閉ざされていることを知りつつ、理知を捨て、衝動的行為の模倣によって、扉が開かれているかのような時間を生きようとする「私」を表わしているように思われるのである。

V

以上、作品「金閣寺」の「私」にとつて、放火という行為が、また、放火犯であることが、どのような意味を持つものであつたか（あるいは、意味を持たないものであつたか）ほゞ明らかにできたように思われる。この「私」が三島由紀夫自身であることを詳細に論じる余裕はないが、作家三島由紀夫について論じるために、「仮面の告白」との大きな比較を試みたいと思ふ。

まず、幼年時代については、「金閣寺」でも「仮面の告白」でも、「私」は、両親がその役割を充分に果たさない環境の中で育つてゐる。^(注)そして、少年時代については、夢想が外界に実在し、そこから自分は疎外されているという、「金閣寺」で吃音という形で描

かれたものが、「仮面の告白」では、近江といった、少年に男らしさの象徴を見出し、それに憧れると同時に嫉妬する、「私」の性的倒錯として描かれ、また、そうした状態を戦争が引き延ばし、定着させたという点でも、両作品は一致している。

しかし、「仮面の告白」という作品全体に関しては、このような単純な形で、「金閣寺」と一致しているわけではない。「仮面の告白」全体は、人々が欲望を追求するのに懸命であり、抑圧に対抗する、個人が価値とされた戦後社会の中でより強烈な欲望を演じ、それを提供することによって、生きようとしたという意味で、「金閣寺」の中の、「私」ではなく、柏木に対応しているように思われる。^(注)

そのように考えると、作品「金閣寺」は、「仮面の告白」以後の三島由紀夫の展開、というよりはむしろ、「仮面の告白」で一旦は期待された認識的な方法が、美の夢想に適さないものであったという、挫折の表われということになる。^(注)つまり、心象と現実、あるいは、美と人生、といった対立するものにはさまれ、両方を望むためにそのどちらをも選ぶことができない葛藤状況の中で、考えることを、すなわち、対立を生じさせている意味そのものを断つことによつて、あたかも葛藤が存在しないかのような幸福な時間を得たいという、「金閣寺」の中の「私」の願望は、そのまま三島由紀夫自身のものであり、金閣寺放火という、すでに為されてしまった衝動的行為と自分自身とを結びつけようとする、作品「金閣寺」の創作動機も、その表われであるように思われる。

しばしば、三島由紀夫は、絶対的美や英雄的人生といった自分の嗜欲を強引に追求し、それに殉じた作家として扱われるが、その一

方で、それらとは全く逆の現実の社会や平凡な人生といったものにも同時に魅かれ続けていたのであり、戦中、戦後という不安定な状況の中でその葛藤を論理的に追い詰めた結果、自己の内にそうした相反するものが共存するという自我の分裂を認めず、美と人生とのどちらにも、そして、自分自身にさえも確かな基盤を見出すことのできなかつた作家であるように思われる。

心象に対し、抑圧された欲望という基盤を与えることでそれを現実化し、さらには、論理的な知の行き詰まりから、衝動的な身体的行為によつて心象を表現しようとするといったことは、現代の我々にとつてすでに馴染み深いものであり、それを三島由紀夫の現代的リアリティの証明であるとすることもできるが、しかし、何を、どう現実化するのかという認識を捨て、ただ心象を現実化する行為だけが純粹に自立することは、論理的知に対する過剰な期待が裏返された、自己欺満の演技でしかない。

三島由紀夫の死と作品「金閣寺」とは、しばしば関連づけて考えられるが、仮に、三島由紀夫の死が「金閣寺」の中で象徴的に予言されているとするならば、金閣に放火する場面よりも、父親の死についての、次のような部分にそれは表われているように、私には思われるのである。

それはまるで、職務をあまりにも忠實にやつてのけたといふ感銘を與へ、死に方を教へて廻つてゐた者が、自ら實演してみせてあやまつて死んだやうな、一種の過失と謂つた感を與へる。

〔注〕

- 1、「裸體と衣裳」引用は新潮社版『三島由紀夫全集』による。
- 2、三好行雄「背徳の倫理——『金閣寺』三島由紀夫」（『作品論の試み』所収、至文堂）、また、三枝康高「『金閣寺』の作品分析——放火事件と『金閣寺』」（『日本文学研究資料叢書 三島由紀夫』所収、有精堂）
- 3、「美のかたち——『金閣寺』をめぐって」（『文芸』昭32・1）
- 4、中村光夫「文学のあり方・4・『金閣寺』について」（『文芸』昭31・12）
- 5、「群像」（昭31・11）の「創作合評」での平野謙の言葉。
- 6、本文の引用は、新潮社版『三島由紀夫全集』によった。
- 7、具体的には、鶴川に対して「私」が吃らずに話せるという形で陳外の解消は描かれている。
- 8、このことは、すでに「敗戦」の日の金閣の様子の中に、感覚的な形で描かれている。
- 9、「三島由紀夫の作品を読む」（『國文學』昭56・7）の中で、松本徹の「七章からガクッと調子が変わって」いるという指摘がある。
- 10、ここで、エディプス・コンプレックスという心理学的仮説をとるならば、これは、エディプスの不在であり、「私」の金閣に対する同一化欲求と被抑圧感は、果たされなかったエディプス・コンプレックスを補償するものであり、放火を、言わゆる「父親殺しの欲求」の延長と見ることもできる。
- 11、「仮面の告白」ノートの中で、「この本を書くことによつて私

が試みたのは、さういふ生の回復術である。」という三島自身の言葉がある。

12、磯貝英夫「三島由紀夫の文体と言語美学」（『國文學』昭51・12）の中に、三島の文章の美と論理とを折衷しようとする無理について指摘がある。

——広島大学大学院博士過程後期在学——